

氏 名 李 善 愛

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第302号

学位授与の日付 平成10年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 『韓・日両国における濟州島海女の移動と定着に関する
民族学的研究』

論 文 審 査 委 員 主 査 助 教 授 朝 倉 敏 夫
教 授 小 山 修 三
助 教 授 岸 上 伸 啓
助 教 授 高 橋 公 明 (名古屋大学)

論文内容の要旨

本論文では、韓日両国における済州島海女の移動と定着をとりあげた。具体的には、済州島海女の移動と定着の歴史的過程の再構成を行なった。ついで韓国蔚山A洞、対馬、房総・志摩半島、大阪という広い範囲に渡る済州島海女の生活史を記述し、彼女らの海洋資源利用と生活実態、つまり生態、社会、文化環境への適応の様子を明らかにした。

これまでの海女の研究は、海女の身体能力、道具と技術、地理的分布、社会組織それ自体を分析の中心としてきた。ただし、海女の生活を社会的・文化的、歴史的コンテクストの中で総合的に見ようという視点が十分とはいえない。例えば、日本と韓国の間には済州島海女の移動の長い歴史がある。ところが、歴史的な資料による研究は、そうした海女の生活や、彼女たちの生活の実態を取り扱っていない。そこで、これまで無視されてきた済州島海女の生活実態と歴史に焦点を当てようというのが、私の研究の出発点となる。

本研究の目的は大きく二つの点にある。第一に、済州島海女の移動と定着の歴史的過程を再構成。第二に、済州島海女の韓国本土および日本における適応の様子の記述にある。そこからえられた彼女たちの生活実態を生活ストラテジーという概念を用いて、分析を試みた。ベネットの問題提議をうけて人間が生態的環境にどのように適用し、また、社会的環境の中でどのような生活実践を行なうか、その際にとられる主体的な行動の総称をここで私は生活ストラテジーと位置づけている。構成は、序章と終章を除き、全部で7章からなる。まず序章では、これまで述べた研究目的と方法について記述した。

第1章では、潜水漁という漁法を定義し、東アジアの潜水漁は「女性が参加する、移動の激しい専門化した集団」があることに注目した。そこで、韓国の海女集団をとりあげ、アンケート調査や文献資料を用いて済州島海女の現在の分布状況を検討した結果、韓国海女の形成は、済州島海女が核となっており、その済州島海女は韓国本土のみならず日本・東アジア全域に分布していることを明らかにした。そしてこのような済州島海女の分布にいたる歴史的経緯を文献資料を用いて検証した。

第2章では、韓国における済州島海女の例として蔚山A洞での民族誌的資料を提示した。蔚山A洞は済州島海女の出稼ぎ先でもあり、その済州島海女を中心に100人近い海女の集団が形成されている、典型的な海女村ということが出来る。この蔚山A洞での漁業組織、漁具と捕獲採集物、生産暦、漁業活動を記録することで、海女集団の経済活動と社会関係について述べた。

第3章は、蔚山A洞における済州島海女と地元海女の詳細な生活史を記述した。済州島海女が蔚山A洞に定住する過程と、彼女たちの影響を受けて地元の女性が海女を職とすることを選ぶ過程に分けて記述した。さらに韓国内における他地域の海女の生活史を提示することで蔚山A洞での海女の形成過程を位置づけた。そこで明かとなる済州島海女の移動と定着の過程から、韓国海女の形成について3期にわけるとを提示した。第1期は、1895年から1920年代までで、済州島海女が賃金労働者として定着を開始した時期である。つまり、済州島海女の出稼ぎ期である。第2期は30年代から60年代までで、済州島海女に触発されて韓国本土の地元海女が出現した、本土地元海女の形成期である。第3期は70年代から現在に至るまでで、韓国全体の社会変化の中で済州島海女が、地元海女とともに漁業生産共同体の一員に加わり、ワカメ漁場の利用管理権を獲得した時期である。

第4章では、濟州島海女の移動と定着にはワカメ漁場の管理と利用のあり方が大きく関わっている点に着目した。濟州島海女は韓国の他地域にも移動・定着しており、それら地域のワカメ岩の管理と利用に関する事例から二つの類型が設定できる。第1の類型は、個人がワカメ岩の管理・利用権を占有する場合である。海女は管理・利用権をもたず、管理権をもつ個人との間に雇用関係を結んだ賃金労働者と位置づけられる。第2の類型は地元の漁村契や村が管理・利用権を共同占有する場合である。海女は賃金労働者である場合もあるが、漁村契員の一人に加わったり、漁業管理権をえてワカメ漁業に主体的に関わる可能性も残されている。そこで、蔚山A洞の事例を第2の類型に位置づけられた。

第5章では、日本において濟州島海女がどのように入漁権を獲得し、社会環境に適応していったかを対馬の事例を中心に記述した。そして、濟州島海女が異なる漁業制度や文化的背景をもつ日本へ移動し、そこで新たな技術導入、日本人地元漁民との競合、子供の就職問題などに適応し、多様な生活形態をとってきたことを明らかにした。

さらに、その他地域に渡った濟州島海女の生活史と生活形態の比較を行なった。房総半島では、地元漁民との協力関係を作りつつ定着しており、志摩半島では、大阪の濟州島人のネットワークを背景として移動するということができる。また、大阪では濟州島出身者が集住するという特性から日帰りの海女や海女以外への転職を行っており、濟州島人の社会的ネットワークの存在、濟州島との緊密な関係の存在が明らかになる。

第6章では、第3、4章で記述した蔚山A洞の濟州島海女と、第5章で記述した対馬の濟州島海女の事例を比較した。そこから二つの地域の濟州島海女たちが、生態的環境と社会的環境という制約に対し、どのような生活ストラテジーを選択しているかの対照性が明らかとなる。すなわち、蔚山A洞では生産の場と生活の場を同じくする定着ストラテジーを選択しており、一方、対馬では生活の場と生産の場を別々にして生活する移動ストラテジーを選択している。

以上のように、移動や定着といったストラテジーの違いの裏には、彼女たちが移動先で生活していく過程で「差別」や「国境」という問題に関わらざるを得なかったという事実がある。そこで第7章では、濟州島海女を取り巻いてきた社会的環境を差別と国境という問題から考察した。韓国社会では濟州島海女に対し、多層的な構造をもつ差別がある。また、日本社会では濟州島海女に対する職業的差別は比較的少ないものの、在日韓国人という差別の枠組みが存在している。次に国境という問題に眼を向けると、濟州島海女は、常に東アジア全域を舞台として移動を続けてきた。また、現在の濟州島海女の行動パターンを図式化してみると、濟州島はアイデンティティの場、大阪は生活の場、対馬は生産の場としてこの三つの空間を国境を跨って往来していることがわかる。

以上、私は濟州島海女の移動の問題、資源利用の問題を検討してきた。その中でもワカメ漁場の利用と所有問題については、広く環境システムと関連した資源利用の問題ととらえることができ、その視点にたって考察を深めて行くことが今後の課題と考えられる。さらに、世界各地には、海を生計手段の場とし、広い活動範囲をもつ人々が見いだせ、本研究でとりあげたように、そこには生態的環境と社会的環境や国家という枠組みに対する、実に多様な生活ストラテジーが見出せることであろう。こうした人々の生活ストラテジーを比較検討していくこと、その手始めとして東アジアの他地域、とりわけ日本の海女に注目している。

論文の審査結果の要旨

本論文は、韓国済州島海女が韓国本土および日本各地に移動・定着した過程を民族学的に研究し、彼女たちの生活史を通して、韓国本土への移動・定着の歴史的過程を再構成するとともに、済州島海女が韓国本土および日本において、それぞれの生態的、社会・文化的環境のなかでどのように適応してきたかを「生活ストラテジー」という概念を用いて分析しようとしたものである。済州島海女を移動・定着という視点から考察しようとした独創的な研究であり、文献調査と二年にわたる韓国および日本各地でのフィールドワークに基づく事例研究として貴重である。

第一章では、アンケート調査や文献資料を用いて済州島海女の現在の分布状況が明かにされ、東アジアにおける済州島海女の歴史的・地理的概況が示されている。

第二章では、韓国本土に移動・定着した済州島海女の事例として、100人近い海女の集団が形成されている典型的な海女村である蔚山A洞がとりあげられ、そこでの漁業組織、漁具と捕獲採集物、生産暦、漁業活動など、民族誌的記述が提示されている。

第三章では、この蔚山A洞での済州島海女と地元海女の詳細な生活史が記述されている。そのうえで韓国内の他地域における海女的生活史が補充され、文献資料と合わせた韓国海女の形成史が再構成される。

第四章では、済州島海女の移動と定着がワカメ漁場の管理と利用のあり方と大きく関わっていることに着目し、二つの類型が設定され、蔚山A洞の事例がこのうち第2類型に位置づけられることが指摘される。さらに、ワカメ岩の管理と利用にあたり、例えば済州島海女の「親睦会」と地元のワカメ岩主や漁業組合の間の衝突・葛藤など、済州島海女と地元民との社会的関係についての具体的な事例が報告されている。

第五章では、済州島海女の日本への移動・定着について、対馬の事例が報告される。そこでの移動・定着の歴史的過程が記述されるとともに、異なる漁業制度や文化的背景をもつ日本へ移動し、新たな技術の導入、日本人地元漁民との競合、子供の就職などさまざまな問題に対し、彼女たちがいかに対処したかについて記述されている。そして、対馬以外に、房総半島、志摩半島、大阪に渡ってきた済州島海女的生活史の聞き書きによって、済州島海女の適応のあり方のヴァリエーションが提示されている。

第六章では、蔚山A洞と対馬の済州島海女が、それぞれの地域における生態的環境と社会的環境に対しどのような生活ストラテジーを選択しているかについて移動ストラテジーと定着ストラテジーの概念を設定することによって、この両者を対極的に把握している。そして、この両ストラテジーの対極の構図のうえに房総半島、志摩半島、大阪での事例が位置づけられる。

第七章では、済州島海女の移動と定着のストラテジーの背景には、「差別」と「国境」という問題に関わらざるを得なかった事実に着目し、済州島海女を取り巻いてきた社会的環境について差別と国境という概念を使って考察されている。

本論文は、1) 済州島海女の移動・定着に関し、歴史、生態、社会の三つの側面から総合的に捉えようとした点は評価されるが、それぞれの側面をより有機的に連関させ論述することが望まれる。2) 済州島海女の移動と定着にワカメ岩の管理と利用が大きく関与し

ていることを指摘しつつも、その歴史的検証に若干欠ける部分がある。3) 差別と国境の問題についても、一般の済州島人の移動・定着と海女のそれとの比較のなかで海女であることの特性が十分に論じられていない、などの今後の課題は残されている。これらの指摘を将来の研究に活かすことが望まれるが、韓国、日本の各地において精力的に海女の生活史を聞き書きし、済州島海女の移動と定着に関して実証的に研究した点は高く評価できる。以上のことから、本論文は学位を授与する水準にあたるものと認定する。